

前中西遺跡出土木製品展



会期：平成24年4月16日（月）～8月31日（金）

会場：熊谷市立江南文化財センター展示室

1 あいさつ

日本は、木の文化です。木は、私たち日本人にとって、最も馴染みの深い素材です。遺跡からは、土器、石器、鉄製品などの出土品が発見されますが、最も馴染みの深く、生活に不可欠な木製品の発見は、非常に珍しいです。幸いにも、本市は低地が大きく広がり、この低地に所在する遺跡では、木製品を現在まで遺存させる環境が整っていて、木製品が発見されるケースが多いです。

江南文化財センターでは、毎年計画的に市内遺跡から出土した木製品の保存処理を実施し、後世に伝えるべき方策を採っていますが、このたびは、その成果を公開する展示として前中西遺跡出土木製品展を企画いたしました。

2 前中西遺跡と発掘調査の成果について

前中西遺跡は、市東部の妻沼低地の自然堤防上を中心に広がる、縄文時代後期から近世に至るまでの複合遺跡です。特に、弥生時代中期から後期（今から約2,100年前～1,900年前）には、大規模な集落が展開した場所です。平成22年度、市東部の前中西遺跡範囲のほぼ中央の発掘調査地点で、古墳時代後期（今から約1,400年前～1,300年前）の河川跡が発見され、多数の土器と共に、鋤、横槌、下駄などの木製品が、ほぼその当時の姿のまま発見されました。

この河川跡は、現在も遺跡内を東へ流れる衣川の旧流路と考えられ、堰跡も発見され、当時水田などの農地に水を引いたものと想像されます。また、遺跡内での古墳時代後期における実態が推定できる貴重な発見でした。



前中西遺跡位置図

3 展示木製品について

展示品は、一本平鋤2点、一本又鋤1点、横槌2点、下駄2点です。

なお、参考として、同時期・同種類の諏訪木遺跡出土木製品を展示しています。

(1) 鋤（すき）

鋤は土掘り具で、鍬と並んで最も基本的な耕起具の一つです。「押し」、「踏み」、「すくう」という動作によって土を掘り起こすもので、鍬より深く耕することができる利点があります。現在の鋤は、身全体が鉄製で、木の柄を着けたものが多いですが、最近まで、木製の身に鉄製の刃先を着けたものが主流でした。稲作が伝わった頃の鋤は、刃部まで木製で作られていて、次第に刃先から鉄器化していきました。

このたび展示した前中西遺跡出土の鋤のように、同一遺跡の同時代の遺構から多種類の鋤が出土することは、当時、土質や用法の違いで使い分けられていたことが想像されます。なお、身と柄を同一の木から削り出したものを「一本鋤」、刃部が股状に分岐していないものを「平鋤」、分岐しているものを「又鋤」と言います。

(2) 横槌（よこつち）

横槌は調整具で、打ちつぶすための道具です。現在も民具として残るものから、①わら打ち用、②豆打ち用、③こうぞ打ち用、④砧用、⑤綿打ち用、⑥工具としての転用、⑦形代としての転用、という少なくとも7つの機能があると考えられます。

このたび展示の諏訪木遺跡出土の横槌は、石や木の台の上に折り畳んだ布を置き、叩く砧用の可能性が考えられます。

(3) 下駄（げた）

下駄は服飾具で、農具としての田下駄は弥生時代から存在したと考えられます。また、はき物としての下駄は、4世紀末～5世紀以前には出現していたと考えられます。

下駄には、足がのる台と接地する歯とを一本で作る連歯下駄と、台に歯をほぞ差して結合する差歯下駄があり、差歯下駄が出現するのは平安時代後期以降です。

このたび展示した下駄は、いずれも連歯下駄です。



一本又鋤
出土状況



下駄
出土状況

すわのきいせき
(参考) 諏訪木遺跡

市東部に所在する集落遺跡で、前中西遺跡と同様に、衣川の旧流路である河川跡が発見され、主に古墳時代後期から平安時代にかけての遺物が発見されています。

出土遺物は、水辺の祭祀にかかわるものと考えられ、古墳時代から奈良時代以降の律令時代へと、祭祀の形態が変化していった様子が、出土遺物から読み取れる貴重な成果が得られた遺跡です。

また、祭祀にかかわる出土遺物のほか、河川跡の両岸に形成された律令時代の集落が、一般集落とは異なる官衙的要素（役所等の性格）をもつ特殊な集落であると考えられている遺跡でも注目されています。

平成24年4月16日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）